

オジロアシナガゾウムシ

昭和20年代初期、第二次世界大戦終了の翌年私はこの世に生を受けた。家で米を作っていたのに当時は全部供出米として出してしまうので、米穀通帳を持って米やうどんなどと交換をしに行っていた覚えがある。私が下宿をするようになってからも米穀通帳か何かを持っていかなければ食料を買えなかったことを思い出す。

調べてみると1941年(昭和16)に6大都市の各世帯に米穀通帳の交付を始め翌年には全国的に実施されたとあります。当時の配給量は1人1日約330グラムでしたが、終戦前後には量も減り、遅配続きだったようです。1951年(昭和26)ごろからは米穀事情も好転し、食糧管理制度も緩められ、米穀通帳の存在意義もしだいに薄れ、1982年(昭和57年)に廃止となりました。

そこで思い出すのが穀ゾウムシだ。「また穀ゾウムシが出た」と言って母親がよく米びつの乾燥をしていたが、覗くと像のように長い鼻をした虫が米びつの中に蜘蛛の巣のような網を巣くっていた。これがゾウムシとの初めての出会いである。私はお蔭様で言われたことはなかったが、親が子供を叱るのに「コクゾウムシ」という言葉もあつたくらいで、大人になった今もゾウムシという名に罪悪感さえ感ずる。

5月24日、家の前でクズ(葛)のつるにしがみついている虫を2匹見つけた。明らかにゾウムシで、それも立派な鼻(の形)をしていて、ツルの中に突き刺している。

なんと立派な鼻(だろうか)?ここから養分を吸い上げるので口というべきだろうか?体を鳥の糞に似せて外敵から守っている蜘蛛のトリノフンダマシと似た配色でうまく擬態化している。このゾウムシの名前はオジロアシナガゾウムシ。翌日にはクズのつるは萎びてふんにやりとしていた。



体長は10mm程度。左側の写真では鼻の巨大さがわかる。右の写真はその鼻をクズのツルに差し込んで樹液を吸っているところ。

おとなしい虫で手を出すと下に落ちてしまうそうだが、またここまで登ってくるのは大変だろうとそっとしておいた。(これでも翅があるのです)